

二代目義太夫の鴻業

二十四歳で櫓下となる

土を耕し、種を蒔き、三十餘年の永の間、毎日、しほにかけて育て、來た、義太夫節がやう／＼に緑の葉を出し、末の繁茂を見せやうとしてゐる時、惜しいかな、主の義太夫は死んでしまった。もしもこの若樹を、このまゝに捨て、置いたら、云ふまでもなく、そのまゝ枯れ果て、了ふであらうが、天義太夫の誠意を嘉納ましく、美ごとな後繼者を義太夫にくださった。

話はすこしもとへ遡る。正徳四年九月十日、一座が杖とも柱とも頼む義太夫に先立たれた、多くの門弟や竹本座の連中は、悲痛哀傷のうちにも氣にかゝるは、明日からの竹本座の運命である、さうして更に適切な問題は、義太夫に代るべき櫓下の名前主である、これは一日も忽に出來ぬことだつた。いつたい誰れになるのだらう、とかうお互ひには云つてゐるものゝ、そこは人間の淺間しさ、高弟達の中では、内々肚づもりで此名譽を荷べきもの、先づ俺れを措いて他にはなからう、我が我がと取らぬ狸の皮算用をしてゐるものも無いではなかつた。けれどもこれは好都合に、さすがの偉人義太夫ほどの人だ、ちやんと自分で後繼者を選んで遺言状を作つて置いたから、先づは醜ひ争ひなどは起さないで、直ちに決定をする問題になつてゐた。ところが開いて見ると意外とも意外、多くの門弟達はあつと驚いて呆然自失してしまつた。これは門弟達の驚きに無理はない、我身の上にかゝる大問題だ、傍で聞いてゐたその座の關係者達さへ容易に信ぜられないで已れの耳を疑つたのだ。ところが遺書には判然と、門人和哥竹政太夫の名が認められてゐる。故參の門弟には相當の年輩で、既に一家を爲してゐる人さへある、俺れが俺れがと内々鎬を削つてゐた連中は、驚きよりも一層、なんだ馬鹿々々しいと、寧ろ腹を立て、ゝゐる手合ひも中にはあつた。逆恨みながら義太夫の肚のうちをさへ疑つたものもある。それもその筈、政太夫は新參も新參、遙かドン尻に控へてゐるまだ二十四歳の青二才であつたのだ。だが恨んだつて憤つたつて、追つくわけのものではない、嚴然たる先師が遺言である、どこか見どころがあつての上には違ひない、もとより悟りきれない連中は、いつまでも、ぐずぐずと云つてゐたが、幸ひにも先師の友人として、物の解つた準後見格の近松門左衛門がこのごたくを圓滿に鎮めてしまつて、幸ひに事なく濟むには濟むのだが、さて若輩の政太夫が、義太夫節の總旗頭、竹本座の統領、名譽ある櫓下に納まつて、果してその責任を盡せる

や否や、世間注視の問題に移つて行つた。

この晴れがましい位置に据えられた政太夫、先師の遺訓を身にしめて、大覺悟をもつて臨んだにはちがひないが、悲しいかな、さう一時に信用は繋がれない、二三興行は殆んど成績不良、おまけに、不平黨の旗頭大和太夫などは二三の連中を引連れてサツサと退座して行くといふ心細さである。何んとかしなれば竹本座ももう此まゝ亡びてしまふのではないかと思はれるやうな状態になつて来た。

義太夫歿後一座の後見格になつてゐる近松は、己が執りなした政太夫を此際なんとか救はねばならないと、それはく日夜苦心慘憺して、とう／＼『國性爺合戦』を書き卸した。奇抜な趣向と舞臺面の變化と例の妙筆とでもしらく出来てゐる上に、政太夫が決死的の努力で遂にこれを大成して、一度に人氣を取り返し、古往今來類を見ぬ劇壇に於ける大記録を作つて、三年越し十七ヶ月に互る連續興行をしたといふのだから凄じい。かうなると次第に調子がついてくる上に、脱退をした者も歸つてくる、政太夫の名聲は日に日に高まつて行つて、はじめて義太夫の睨んだ眼に狂ひが無かつたことがわかつて来た。

異數の拔擢と、門左衛門の愛撫によつて、嶄然頭角を現はして来た政太夫はもとより凡人ではない。暫く彼の閱歴を見てみる。

元祿四年、大阪嶋の内三ツ寺町に生る。藤姓水原氏、字播磨屋長右衛門、幼名長四郎、諱は喜教よしのり、又は文正翁。家は中紅家と云つて資産家であつたらしい。幼少から淨瑠璃を好んで、素人天狗の仲間でも、頭抜けた天才であつた。やがて長四郎は、斯道の誰れもが羨んでゐる、見識のある太夫に成りたいものと志を立て、義太夫の門に入つた。彼れはその後熱心に稽古を勵んで、早く舞臺へ立ちたいといふ望みを起し、師匠にそのことを頼んだが、なか／＼それは許されなかつたのである、といふのは、當時は演し物が五幕あるとすれば、その五幕ともに切場は櫓下が勤め、端場を他の太夫が勤めるといふ習慣だつたから、芝居出勤と云ふことになるとなか／＼後輩にお鉢が廻つて來ない、それにもう一つ太夫としての當時の重要條件が、音吐朗々たる大聲か、或は艶麗玉の如き美音家で無くてはならなかつた。ところが不幸にして彼長四郎には、そのどちらの一つも備はつてはゐないのである。美ごと落第をした。ところが本人なか／＼諦めきれない、すぐお隣りの東の芝居に櫓を上げてゐる豊竹座の方へ行つて、その舞臺へ上げて貰ふことになつた勿論師匠の許可は得てゐた。この時寶永七年、彼二十歳である。それからやがて京都へ移り、また大阪へ戻つて、こんどは曾根崎の芝居へ出たりしてゐた。その二年間の彼はウンと腕を磨いて、天才の閃きがおい／＼濃厚にあらはれ始めて來てゐた。そこへ思ひがけなく先師義太夫から、竹本座へ出勤せよといふ吉報が齎らされたのである、彼れは始めて己れの素志が貫徹したことを悦んだ。義太夫の思はく

では、現在はともかく、これから先の義太夫節は、どうも今までのやうな、聲ばかりでは不可い、義太夫節百年の大計はやはり藝の内面にある、ところが最近政太夫を聞いて驚いた、彼は聲はないが、その無い聲で、人情の微を穿つた語りぶり、チラチラと義太夫の思ふ圖に當つてくる。こゝに義太夫の想像してゐる、聲よりも腹で語る、といふ新らしい天地が仄かに見えるやうな氣がした。で、とりあへず我が手元へ呼び返している／＼と薰陶をして見た。ところがその鋒鋦が次第に現はれてくるので義太夫は非常に満足した。正徳二年三月といふから、義太夫の死ぬ二年七ヶ月前のこと、竹本座では『丹波興作』が出て、政太夫に道中双六の場をお目見得に語らせたのであるが、大方のものは情味の豊かな語りぶりに舌を巻いたそうだ。そんなわけで、義太夫は、とう／＼多くの門人の中から政太夫を後繼者に拔選したのであつた。果せるかな、この政太夫が、大物も大物、素晴らしい名人になり、義太夫節をして遂に千年の長命者に育て上げ、師匠ではまだ完成しなかつた、近松の世話物を思ひの儘に語りつけた偉業に於ては、とても匹敵する者が無い。

それは一つは近松の子を見るやうな慈愛に哺くまれ、政太夫がまた祖父に盡すやうなまこと、があつたればこそ（實際に於ても近松六十三歳、政太夫二十五歳）かういふ美しい實を結んだわけだが、『天網鳴』『女殺油地獄』『宵庚申』『國性爺』『會稽山』『關八州繫馬』かういふ代表的名作はみな政太夫によつて完成されたのである。而かも彼の優れた點はその技藝ばかりではなく、實にその珠の如き人格にある。當時の儒者であり近松半二の親であつた穂積以貫はかう評してゐる。

本詞自ら守り、華美粉飾を避け、邊幅を飾らなかつたから一見尪々として野人の如し。

これは藝人としては珍らしいことで、後年その徳を慕ふて門に集まる者多く、門人の如き、式太夫、佐太夫、包太夫、七太夫、志摩太夫、紋太夫、百合太夫、政太夫（二世）西太夫、を重なるものとして數へ切れないほどである。そんなわけで、享保十九年二月。櫓下となつて二十年目に、他から薦められて、二世竹本義太夫を襲名した。もつとも早くからさういふ推薦を受けてはゐたが、道が先輩に遠慮をして延び延びになつてゐたといふことである。翌二十年十一月上總少掾を受領。元文三年再び勅許になつて、播磨少掾となつた。その一月祝儀興行として、近松の『天神記』の柘榴天神の條を改作して、一曲物『菅相丞冥加松梅』を出語りで勤めて大好評を取り、かういふ逸話をのこした。それは、門人の脇田氏こと竹本喜太夫が長崎逗留中、師傳のまゝを、清國人の姑蘇の沈草亭及び吳志明といふ人に聽かせたところが、非常に感銘してその全文を寫しとつて故國へ持つて歸り、改めて改國から、播磨掾へと石印二個を贈

つて来た。またこの勅許受領の舞臺で使用したといふ播磨掾の正本は（表紙藝題から朱章悉く肉筆のもの）現存の義太夫節朱章入正本としては恐らく最古のものであらう、これは私が正しい傳來によつて襲藏してゐる。

劇壇破天荒の大當りをとつた『國性爺合戦』が、たゞにその時かぎりの一時の人氣ではなく後末どれほど大きな影響を受けたかといふことは記録する必

要がある。政太夫自

身としても、その初

興行の三年目、享保

五年正月、同十六年

五月、寛延三年七月

の三回の外にも度々

上演してゐるが、こ

の作から、五年後に出來た『天網嶋』

にも、第一段河庄の門口へやつてくる

てんがう念佛に、九仙山の文句を取り

入れて

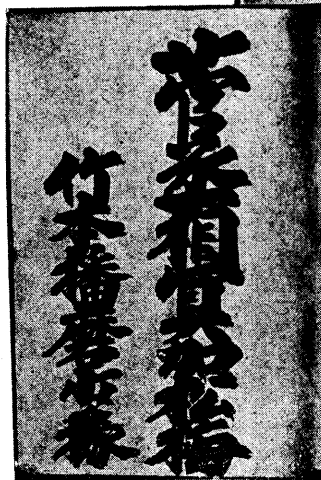
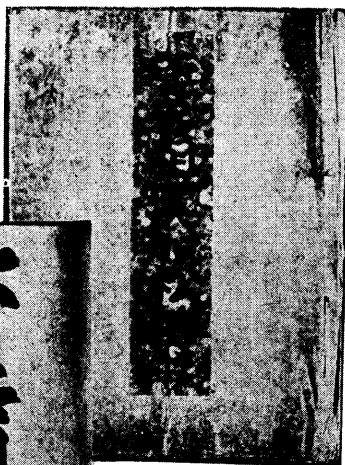
かもん（錦祥女）を上演したのを始め、翌二年には道頓堀の竹嶋幸左衛門、櫻山四郎三郎、姉川新四郎の三座で競争興行を始め、竹嶋が

優勝してゐる。従つて、それが江戸へ飛火して東西双方國性爺流行の火の手は益々熾んになり、殆ど日本中國國性爺で一ぱいになつた

門（甘輝）山本形だ。その影響はやがてまた讀本、草紙、謡曲、繪畫、玩具、人形、菓子、衣裳、なんでもかんでも國性爺でなくては納

まらなかつた。

さて政太夫は、非聲でありながら、（現今では大聲強音でないと語られないと謬られてゐる）三段目の獅子ヶ城を語つてゐるがその初演興行の役割を書いて見るとかうである。



竹播磨少筆蹟

樊噲流は珍らしからず、門を破るは日本の朝比奈……………

それ措いて國往爺の道行念佛が所望ぢや……………

或ひは太兵衛の綽名を、李踏天と

呼ばせてゐるなど、なか／＼國性爺氣分が去らない。尙又享

保二年に同じ近松が『國性爺後日合戦』を同七年に『唐船噺

今國性爺』を書いて居り。敵方の豊竹

座でも、紀海音が『傾城國性爺』を出

し。錦文流の方でも、又『國仙野手柄

日記』といふ文彌節の正本を出した。

さて又歌舞伎の方では、享保元年の秋

京の『都萬太夫座』で、榊山小四郎（和

藤内）芳澤あやめ（母親）柴崎林左衛

序	竹本頼母	貝盡シ	竹本頼母	三段目	口	内匠理太夫
初段	竹本浪花	ツレ	竹本頼母	三段目	口	内匠理太夫
中	竹本文太夫	口	竹本浪花	切	竹本政太夫	
切	竹本文太夫	切	竹本浪花			
道行	竹本文太夫					
ワキ	竹本浪花					
四段目	口	豊竹萬太夫	竹本政太夫			
九仙山	竹本頼母					
景事	内匠理太夫					

おやま人形、辰松

八郎兵衛。立役人形

津山助十郎。全津山

金七。

かくて義太夫節大*

十三番を數ふ。墓碑所在左に

天王寺西門、納骨堂の背後

一、竹本播磨少掾浮圖

前記の西北

一、文正翁曲帶塚（舞臺用腹帯を埋む）



塚帶曲掾少磨播本竹

千日前法善寺（現今不明）

一、文正翁句碑（竹田出雲の讚句あり）

伏見中書嶋建久寺（現今不明）

一、文正翁扇塚（舞臺用拍子扇を收む）

* 成の鴻業を爲し遂げた竹本播磨少掾は、

延享元年三月、竹田出雲、三好松洛等合

作『兒源氏道中日記』の上演中病を得て

遂に七月二十五日、行年五十四歳を以て

長逝した。舞臺生活三十五年、語り物九

生玉口繩阪東天瑞寺（小生發見）

一、不聞院乾外孤雲居士の墓（不聞

院云々は播磨少掾の法名）

天王寺南門南入西側、超願寺元祖義太夫の菩提寺に石碑がある。百八十年忌の頃、大破の爲め、舊地（寺の西南隅）より現地（本堂に向つて右側）に移して修築した、即ち二十六年十二月二十六日落成。石碑供養に越路、彌、内匠、むら、町、大隅、小隅、彌儀、豊澤龍助、豊澤松太郎等が参拜した。ところが、此墓の紋所は竹田出雲の竹の六環内に九枚笹になつてゐる。義太夫の紋所は鞠挿の内に九枚笹の丸である。おそらく此修築の際に誤つたのではなからうか。